魔剣から始まる物語

むささび

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔剣から始まる物語

【Ｎコード】

Ｎ９２９０Ｚ

【作者名】

むささび

【あらすじ】

主人公は少し捻くれている考えをもつ中学生二年生。中学生にしては知識が豊富だが、やっぱりどこか捻くれていて、時折人生を悟ったような風を見せる。そんな主人公、向井（むかい）　夕（ゆう）は、ある日を境に、見たこともない世界へと飛ばされてしまう。そこで見つけた剣から、彼の物語がスタートする。

基本的にまったりと進む物語。一話ごとの文少量は少なめでさくさく読めていけるような小説にしていけたらと思います。

００？　プロローグ（前書き）

彼の周りは木で満ちている。真っ暗で、月だけが彼に微笑みかけていた。彼は、そんな中で目を開ける。

00？　プロローグ

さっきまで、燃え盛る家にいたと思ったんだけど、

ここは、どこだろう。

「……夜。だね」

周りは暗いな。

ここは、森？

変な鳥の鳴き声も聞こえる。「ほぐ、ほーぐ」……こんな鳴き声する鳥がいるかは怪しいけど。

空が、きれいだな……。

月がまん丸……やけに大きいし青白い。僕の知っている月とちょっと違う。

……そろそろ状況整理をしないと。

えっと、柳井さんの家が燃えた。燃えたね。それで、春が取り残されたって叫びながら隆介が家に飛び込んだって聞いた。僕も飛び込んだ。春がタンスに挟まってて、それをどけようと隆介が頑張ってたから、手伝った。春を助けて、それから、家の外に出て。

……いや、出てないか。出ようとしたら家が崩れたから2人を突き飛ばして、僕が下敷きになったのかな？

……死後の世界かな、ここは。

「綺麗なところだから、天国？」

暗いけど、空気は澄んでるし、星は見えて綺麗だし、葉は青々と生い茂ってるし。

「……死んだ後が皆こうなら納得だけど、普通に傷口から血が出て痛いし、服は焼け焦げてて肌寒いし」

意味不明だよ。死んだら、そのときの姿のまま幽霊になるとか、そんな話もあるからまだこの姿に納得してもいい。服がボロボロで焦げて焼け落ちて、ちょっと生まれたときの姿に近いのにはまだ納得できる。ただ、寒くてだんだん体調が悪くなるのには納得いかない。

……まぁ、このままま死ぬのでも構わないけど。

いや嘘。せっかく変なところに着たんだから観光でもしないと損だ。

よっし、節々が痛いから、あそこに見える祠みたいなところで休憩してから出かけますか。

あれ、あそこ……剣？　見たいなのが刺さってるな。台座に刺さってるとかならかっこいいのに、無造作に壁に突き刺さってるって言うのもどうなの。

この先何があるかわからないし、ちょっと拝借しようかな。見た目ボロボロの剣だけど、ないよりはマシでしょ。

そう思って手に取った剣が、僕の異世界での物語の起点だった。

異世界生活初日。

向井　夕　（むかい　ゆう）　現状

武器　　？？？

防具　　燃えカスの服

重要道具　もってない

所持金　　５００円（ポケットに入っていた）

技術　　？？？

職業　　中学二年生だった

００１（前書き）

彼は助けられる。人の手が彼を明るみへと運んだ。彼の運はここで尽きる。残るは悪運か。

001

僕は向井夕。むかい、ゆう、だ。

趣味は観光名所巡り。といってもまだ日本の数箇所しか回れないお小遣いが少ない極一般的な中学二年生。でも実際、あれってあんまりロマンがないよね。僕の好きなこととして未知かつ未発見で、誰も見たことのないような絶景を探すって事をしたいと思っていたけど、いまやインターネットやら、雑誌やら、何かを使えば簡単に絶景の写真が簡単に手に入る。

そんなことに半ば萎えているだけの、勉強に熱心で、スポーツもそこそこやっていると自負している、普通の中学生。

だった。

「小僧！　さっさと掃除を済ませろ！」

「ごめんなさい……」

怒鳴らなくても掃除くらいするよ。飯を食うには仕方ない。さらに言葉も教えてもらってるのだから、頭が上がらない。けど腹は立つね。はぁ……。

「いいか。俺の食堂で失敗はゆるさねぇからな！」

失敗って言っても、言葉を知らない僕にどう仕事しろと。とりあえず、ウェイターみたいなことはやって手伝ったりはしてるけど、いかんせん言葉が上手に操れない。とにかく、今は掃除。掃除はとりあえず、掃除機的な道具が無いから拭き掃除が基本だね。今はあったかい時期だからいいけど、冬になったら僕はシンデレラになれるんじゃないだろうか。……ってあれ、おっさんどこいくんだ？

「アンデの、店長、どこ、行く？」

「買出しだよ！　仕事を済ませとけ！」

と、アンデが店のドアを激しく開け閉めして出て行った。

……はぁ。まさかここが異世界なんて思わないよなぁ。もうあれから３３日経つけど、慣れないよなぁ。

異世界って気づくのには時間はかからなかった。初めてあったあのおっさん、アンデが何も無い手のひらから急に炎をだす、元の世

界で言う、魔法を目撃したからだ。

こりゃぁ、もう異世界としか言いようが無い。隆介が非常に行きたがっていたから、変わってあげたい気分だ。魔法が使えたらどれほどかっこいいことかと事あるごとに嘆いていたからね。ただ異世界の現実の魔法使いは料理屋を営んでいて、そんなにカッコイイわけじゃなかった。いつかもとの世界に帰れたら隆介に教えてあげよう。

掃除おっしまい。うむ、ほこりのある部分が見つからない綺麗具合だ。家事は得意なんだよね。さて、休憩……っと、まだ仕事が残ってた。インクと紙が視界に入ってしまった。

……はぁ、食うためには仕方ない。仕事を済ませてしまおう。ペンはどこだ？

えっと、これ、どう読むんだっけ？　売り上げ、だっけ？　まだ、異世界の言葉が覚えきれない。英語っぽいけど英語じゃない言葉だから、聞く分にはあまり苦労しなかったんだけど、話すとなるとだいぶ苦戦する。もう数ヶ月もすごしてるからちょっとづつは話せるようにはなってる。ホームステイってこんな気分なんだろうな。

でも、数字の概念は元の世界と一緒だった。だから僕は今会計の仕事とか、主に数字に関係する仕事をアンデ店長から貰えたんだけどね。

実際僕はかなり運が良かった。何も口に出来ずにふらふらしてるときアンデに拾われなかったらと思うと、異世界のきれいな景色を見れずに死んでしまうところだった。意味も無く怒鳴り散らす人だけど、根は優しいと思う。腹立つけど。

僕の趣味は名所と景色めぐり。なんだけど、今の生活もままならない状況じゃそんなことも出来ないよなぁ。元の世界であった小説とか漫画みたいなファンタジーの世界だから、戦ってお金稼ぎ。なんて無理だよなぁ。すぐ死ぬよなぁ。剣道はやってたけど、甘くないよなぁ。

魔法っていうのも存在するみたいなんだけど、三年間訓練しないと使えない上に、魔法使うには免許がいるみたいだし。っあ、ここ計算間違った。消しゴム……なんてないよな。紙は貴重品なのに、おっさんごめん。

……にしても、正直この借金は無いよなぁ。家の事情とかまったく話してくれないし、強そうな体してるのに騎士ってやつにはなりたくないって言うし。騎士のほうがいい生活してそうなんだけどなぁ。

……それに、なんだこの修繕費の高さ。毎度毎度何か壊してないとこんなにお店に金がかかるはず無いぞ。

冒険者御用達のお店だからか？　味がいいし量も多いから若い人にうけるのはよくわかるんだけど。気が荒い人も来るってことだよなぁ。

なんて色々やってると、たしかまだ準備中の看板を出していたはずなのに、アンデ以外の人間が入ってきた。これは初めての出来事だ。もしかしたら、お店がもう開いてると思って入ってきたのかな？　ええっと、こういうときは

「これから、お店、準備してね」

だったかな？

「はぁ？　何？」

どうやら違うらしい。ぞろぞろと、四人ほどお店に入ってきた。

「えっと、まだ、お店、開いてる？」

「うぜぇ」

罵倒された。それだけならまだしも僕のお腹に重い蹴りを入れてきた。凄い痛い。なるほど、こんな客がいるから修繕費が高いのかね。こいつら何しに来たんだ？

「アンデの野郎はどこだよ。さっさと払うもん払ってくれねぇと困るんだよ」

「て、店長、売り買い」

買い物ってどうやって言うんだっけ？

「ちっ、使えねぇ」

再び蹴り。あー、店長早く帰ってこないかなぁ。買い物行ったらもうしばらく帰ってこないんだよなぁ。

「おい、酒だ、酒。×××店にも酒くらいはあるんだろ？」

酒？　えっと、お酒を欲しがってるんだな。

「いま、売り買い」

「×××××な店だな。買う余裕があるなら金を払えっつぅのぉ。おら謝れよ。酒無くてすいませんってな」

はい、蹴り。何に対して謝れってんだよ。お店もまだ開いてないんだから酒無くても問題ないだろうが。アホどもめ。そろそろ避けようかな。でも避けたら避けたらでまた逆上するし。あーめんどくさいな。さっさと帰らないかな。

「ごめんなさい。ごめんなさい」

惨めに謝るしかない。まぁ、自分が惨めとも思わないけど。確か、こういうのは一般的に惨めなんだよな。正直そんな感情より早く帰ってくれないかなぁって思いのほうが強い。

……っていうか、客じゃなくね。気づくの遅かった。さっさと追い出せばよかった。

「あはっはっはっは、×××もねぇ×××だな！」

……知らない単語で罵倒されてもなんら悔しくない。はぁ。男四人が僕を指差して笑ってるのはなんとなく腹が立つけど、やっぱり何を言っているのか、単語を知らないから聞き取れない。

「にしても汚い店だな。掃除はやってるみたいだが、テーブルも椅子も古びた木材。しょっぱいなぁ。処分に困ってるなら」

……こいつ。椅子なんか持ち上げて何するつもりだ。僕に当てる

つもりは無いみたいだけど。

「俺たちが代わりに処分してやらぁ！」

……なるほど。客がやるんじゃなくて、こういう糞野郎がくるって理由から修繕費が高いのか。椅子が窓ガラスにたたきつけられて、激しく壊れてしまった。ガラスって激しく割れると、がしゃーん、ってよく擬音で表現されるけど、本当にがしゃーん、って音を立てるんだな。思ったより高い音でうるさいな。

「はははははっ！」

「こいつぁーいーぜ！」

まったく、どこの世界もいじめる側ってやつらは考えることが同じなんだな。……はぁ。アンデに止められてるけど、斬り捨ててもいいかな。この世界のルールってのがいまいちわかってないから危険なんだけど、ここまでされて流石の僕もご立腹だよ。

「なにやってる糞傭兵共」

アンデさん降臨。助かるぜ！　ただ、助けに来た男って言うには、大きな紙袋を抱いて持ってるのは格好がつかないよね。

「あぁ？　×××騎士×××が何を×××てんだぁ？」

「ああ、もう騎士ですらなかったな。はっ、ははは！」

ニヤニヤと腹立つ笑いを浮かべる男。今アンデを騎士とおっしゃいました？　やっぱり騎士だったんだ。やめたのには理由でもあるのかね？

「さっさと用件を言え糞共。俺は今機嫌が悪い。焼くぞ」

うぉ、凄い剣幕。焼くぞって、本当に焼こうとするなよ、右手から火が出てますよ！

「うっ、く、金だ！　献上金を出しやがれ！」

へいへい、敵さんびびってる。アンデはそのまま店の奥に消え、袋をもって戻ってきた。その袋を傭兵達？　の一人に投げつけると、一言、消えろと言った。カッコいい。

傭兵達は苦い顔を浮かべながら、店を出て行った。

「小僧、大丈夫か」

「そこそこ。ごめんなさい」

「謝るな。お前こそよく我慢してくれた。ここであいつ等にちょっかいだすと、ちぃと面倒だからな」

んー。……そんなものかね？　人殺しが頻繁に起こるこの世界であいつら程度不慮の事故で行方不明になっても、特に変わりはないような気がするけど。ただ手を出すくらいのちょっかいとかで小さい店を襲いに来るかな。これでも、元の世界じゃ善良な市民だったんですよ。

「それに、今は××だ。涼しくなるし、ちょうどいい」

アンデはにやりと笑ったが、一部なんて言ったかわからなかった。

後で聞いたところ、夏、って言ったらしい。

しかし、言葉1つ教えてもらうだけでも一苦労だ。相手は日本語も中途半端な英語も通じない相手だ。夏って言葉を理解するだけでもこの世界の日付とか、そういうのから手振り身振りで教えてもらって、この時期が夏だよ、って説明がないと季節すら理解できない。

不便だ。

……もうしばらく言葉の勉強をしないと。

こっちの世界で生活もままならないや。……はぁ。

異世界生活33日目

――――――――――――――――――――

向井　夕　（むかい　ゆう）　現状

――――――

武器　　？？？

防具　　異世界での服

重要道具　もってない

所持金　　500円

技術　剣道

異世界の言葉（ちょっと聞ける、ちょっと話せる

中学2年生レベルの数学

職業　冒険者御用達らしいお店の店員（バイト

００２（前書き）

陽気な空気は彼に世界の知識を与えた。

002

さらに二ヶ月。ほど。確か、９０日くらいかな。

って表現するけど、この世界で日付って概念は無いみたい。あるのは太陽が昇るか落ちるか。お月様が上るか落ちるか、とかとか。そのへんは元の世界と同じなんだな。

「おーい、ユウ！　こっちのテーブルに酒を持ってきてくれ！」

「あいよ～」

すっかり異世界の言葉にも慣れたし。ようやく生活になじめてきた、はず。……いや、まだ覚えてない言葉もあるけど。とりあえず常連の人達には僕の顔と名前を覚えてもらうくらい、このお店にも慣れた。馬鹿が献上金とか取り立てにきた以来、結構平和だし。

あ、お店の名前もようやく意味がわかった。英語で言うと、デーモン。悪魔の店。ってことらしいよ。発音は、デトラオン。そんな言葉前の世界じゃ聞いたこと無いよ。なんかのゲームの魔法みたいな名前だよな。

「いやぁ、しかし気難しいマスターのとこでバイトできるなんてたいした子供だよお前は」

今僕に気さくに話しかけてくれるこの冒険者は、確か、シュッテイマン、だっけ。どうやら、良くあるファンタジー物に出てくるギルド的なものが存在するらしい。そこに従事する人は一般的に冒険

者と呼ばれるそうだ。ただ、モンスターを倒してお金を稼ぐロマンあふれるものじゃなくて、戦闘可能な人を集めてさまざまな仕事を発令する、職安のような場所らしい。特技が戦闘のニートの集まりって感じ。聞こえが凄く悪い。

でもその聞こえの悪くなるような職業が冒険者なんだけど、悪いことばっかりじゃなく、やっぱりお宝を見つけることもあるらしい。ロマンはあるにはあるそうだ。ギルドもまだ未開の土地や、謎めく建物が多かったりするこの世界を開拓する人達を支援してくれるということで、冒険をする人は冒険者になるべくギルドに加入するのが大半だそうだ。

なんだかんだ、ロマンを感じるね。僕はお宝を探すというよりは、未開の地へまだ見ぬ景色を見るってことに凄くロマンを感じる。胸が、熱くなるね！

まぁ、そんな話もそこそこに、バイトの話に戻るけど、僕はお手伝いという行為は慣れっこだ。前の世界でも良くやっていた。

「シュッテイマン、さん。他の人は、バイトしなかったの？」

うん、今僕がしゃべったんだけど、まだ片言なんだ。でも、結構言葉も覚えたよ。本当だからね！

「ん？　いや、したぜ。古びた店のくせに客も」

殺気！

振り向くと、アンデが僕とシュッテイマンを睨み付けていた。怖い。この数ヶ月。アンデがよく誰かに殺気を放つから、殺気を感じ

取るのがうまくなってしまった。言い換えれば、人の気配を察するのがうまくなった。この世界では本当にいろいろな人が自分の気配を消して動いたりする。

消すって言うのも、息遣い、足運び、衣擦れ、そして常に人の影となる部分を意識してそこに自分を置くように動くのが、気配を消すってこと。なんか、こういうのも人が自然と発している気みたいなのがあって、そういうのを消すものかと思っていたけど、違うもんだね。

だけど、やっぱり本物の達人は何か感じ取って人の気配ってやつを読み取るらしい。

そういう人達をこのデトラオンに着てからずっと観察してきたから、五感で感じるほうの気配は結構消せるようになった。足運び自体は、剣道を習っていたこともあってなんら苦戦しなかった。

「おい、シュイ。あんまりマスター怒らせると、また焼かれるぜ？」

シュイってのは、シュッテイマンの愛称。んで、今シュッテイマンを呼んだのは、一緒に冒険者をやってる仲間だ。名前は教えてもらってない。これからシュッテイマンのパーティーは離れた森に現れた、熊のような人食いの魔物を討伐しに行くとの事。無事帰ってきてもう一儲けさせてもらいたいもんだね。

やはり、魔物っていう存在はファンタジーにお馴染みで、理解されない不思議な存在がいた。

死ぬとなぜか体の大半が消失して、殺したという証が残り、なぜかまた同じ種類の魔物が次々とどこからとも無く生まれる。なぜと

アンデに聞いてみたけど、それが常識だと取り合ってくれなかった。うむむ。まぁそういうのがあるからギルドってやつが経営できるんだろうけどね。

「それは、勘弁願いたいな……。つまりな、ユウ。そういうことだ」

つまりすぐ腹が立つことがあったら、焼くぞと脅してくることだろうか。……どうしてだろう。腑に落ちないところが多いけど妙に納得できた。

「酒、置いときますね」

この世界のアルコールはだいたいワインっぽい果実酒だ。ビールのようなものはなぜか高級品指定。というのも、今年は不作だったらしい。食べるもの優先すれば、飲み物は作れませんよね。そりゃ。

不作だったからわからないけど、豊作だったら安いのだろうか？

「おう、ユウ、てめぇも仕事頑張れよ！」

そういってシュッテイマンは僕に数枚紙幣を握らせた。ありがたい。チップをくれる客はそう多くないから、大事にしないと。

「……というわけで、アンデ」

「おい、何で俺は呼び捨てなんだ」

「……は？」

「客にはさんつけて呼ぶじゃねぇか」

文句あるのか？　だって、さん付けして呼んだら怒らない？

「いまさら、さん、つける？　アンデさん」

そう呼ぶとアンデは背筋震わせ、嫌な顔をした。

「……いや、やっぱり、いい」

ですよね。

僕は今期の業務成績を報告した。どうやら、季節の変わり目おきに大きな区切りというのが設定されてるらしい。元の世界で言う月のことだね。簡単に言えば春季、夏季、秋季、冬季が月の代わりみたいなもので、今日で夏季が終わった。

「色々、必要費引いて、純利益は８６万３００ギス」

ギスはこの大陸での通貨。価値は大体１円＝１．５ギス。俺の感覚でね。よーするに、１３０万程度稼げたわけだ。

「……窓なおさねぇとな。いや、もそろそろ屑共がくるから、多少待つか」

季節の変わり目に、取立てに来るらしい。しばらく平和だったのは、そういうことだったのか。

「まぁいい。わかった。てめぇには、店利益の２％やる。もってけ」

「……本当？」

「なに疑ってるんだ。取るもんは取ってるよ。本来なら５％やるとこだが、居候費で差っぴいてるよ」

なるほど。やふー。いやちょっとまって。そんなんで僕養っていけるの？　３％って、３万ギスにも満たない。円換算だと、４万５０００円も無いくらいか。それで衣類あり三食あり住居ありって破格じゃない？

「それだけで、僕、養う？」

「それだけ？　小僧の金の価値観なんかしらねぇよ」

実は、この店の外には出たことがあるが、未だ買い物をしたことが無い。というのも、話せるものの読み書きがまだ不完全だからね。１ギスが１，５円っていうのも間違いかもしれない。

「じゃあ。２％。えっと、１万８０００ギス貰います」

「……ごまかしてないよな？」

「……少し、ごまかしました。本当は１万７２０６ギス」

「なんだ、それくらいならいい、細かいのは持てないだろう。町にも行って財布でも買うといい」

でも、せっかくお金ももらえたし、そろそろ動き出してもいいか

もしれない。給料日が季節の変わり目って言うのは遅くてたまらないね。

今まで集めてきたチップと含めて２万３０００ギス。意外と冒険者っていうのは金遣いが荒い傾向にあるね。それとも、サービスを求めるにはそれが普通なのかな。ならチップを貰うまでは客を荒くあしらってもいいのかな？

まぁ、それは置いといて、ちょうどいい機会だから、現状をまとめておくのもいいかもしれない。

「じゃあ、明日、休みください」

「……まぁ、いいだろう」

アンデ、やさしいぞ？　気持ち悪い。

「い、いいか。一日だけだぞ。夜の移動を避けるためという理由なら、二日後の明朝でも許す。いいか、帰ってきたらしっかり働いてもらうからな！」

なんていうんだ、これは、あ、あれだ、元の世界で言うツンデレの、デレ期ってやつだ！

隆介に紹介したら、喜ぶかな。いや、男のツンデレなんて気持ち悪い、って言いそうだな。やめておこう。

僕は借りている部屋に戻って硬いベットに倒れこんだ。最初は硬くて寝ずらくてたまらなかったけど、慣れてしまえば問題ない。

さて、２万と３０００、ギスか。まずどんなものがどう売られてるのか、市場調査から始めないとな。だまされるなんてたまったもんじゃない。

情報収集とかもしたいな。この世界のことをアンデは何も教えてくれないし。僕の今いる町の名前くらいしか。たしか、ムー大陸の聖なる王国シャルルって国に属してるんだっけ？

そこに属する集落の中でも結構大きい集落にいるらしい。シャルルまでは歩いて１時間って言ってた。危険も無いってシュッテイマンが言ってたから、思い切って聖なる都、シャルルの町に行こう。シャルル国で一番の町だ。国の名前と一致してるくらいだからね。

……にしてもムー大陸って、あれだよな、確か、古代文明が栄えて、今は滅びてって言う、あれだよな。元の世界じゃそうなってるけど、こっちでは健在ってことは、元の世界の昔は魔法が栄えてたのかな？

この世界には巨大な２つの大陸が存在しているみたいで、ひとつがムー大陸。もうひとつがパンゲア大陸。

パンゲア大陸ってあれだよね、元の世界のいろんな大陸の集合体だよね。

それより、ムー大陸とレムリア大陸、って時期違うよね？

ちなみに、アンデは火を扱う魔法使いだ。なかなか教えてくれないけど、昔は炎と剣を操る魔法騎士だったらしい。けど、この国じゃそれはなかなか受け入れられず、ちょっとしたミスを大きく取り上げられて、首にされたらしい。

神聖な国としては、魔を司る術は忌み嫌われているらしい。便利なのになぁ。

そのせいで僕もなかなか変な剣を使えない。

……はぁ。なんだかめんどくさい。

あのまま死ねば逆に楽だったのになぁ。

いやいや、逆にもとの世界で誰も見たこと無い世界を見て回れるって言うラッキーがあるじゃないか。そのために、お金だお金。飽きたら、元の世界に戻る方法でも探して、だめっぽかったら、変な剣があるし。

とりあえず、今後の生き方は、まったり、考えるか。もしかしたら元の世界にも戻れるかもしれないし

異世界生活９０日

――

向井　夕　（むかい　ゆう）　現状

武器　変な剣？

防具　異世界での服

重要道具　もってない

所持金　２万３０００ギス（初給料）　５００円

技術　剣道

異世界の言葉（聞く、話す、ちょっと読む、ちょっと書ける

中学２年生レベルの数学

職業　デトラオン（悪魔の）食堂店員　（バイト）

００３（前書き）

彼の才能は？

003

「すげぇ！　ゴブリンみたいだ！」

「みたいだじゃなくてゴブリンですよ！！」

村を離れて３０分。

緑色で二足歩行で、布切れで体を覆って片手に棍棒を持っている魔物と遭遇した。大きさ的には僕と同じくらい。僕は今１５０ｃｍくらいあるから、ゴブリンも１５０ｃｍくらいなのかな。

……って、あれ？　魔物と会うことは限りなくない、ってシュッテイマン言ってたじゃん。確か、シャルルってとこで魔物が入りにくくなる装置みたいなのがあって、それが正常に活動している限る魔物はこの付近には近寄らないって。

その装置がおかしくなったのか？　それとも、近寄らないのはゴブリン以外とか、そういうことなのか？

にしても、このゴブリン。いろんな冊子とかゲームとかで載ってるままだなぁ。元の世界のそういう情報もあながち間違ってないんだね。

ゴブリンたちの棍棒装備はデフォルトなのかな？

「ちょっと、何喜んでるんですか！　た、助けてください！　どうにかしてくださいよぉ！」

そう叫ばれたように、見ようによっては僕たちは危機的状況にいる。僕と隣にいる少女を五匹くらいのゴブリンが囲っているようにも見えなくない。

うーむ。ここで死ぬわけには行かないしなぁ……。でもこの剣は出来るだけ人前で使わないに越したこと無いってアンデが言ってたしなぁ。周りは森で、人影は無い。走って逃げるにも、シャルルに行くも村に戻るも３０分はかかる。

「ほら、僕、武器ないし？　あなた、どうにかしてください」

「えぇ！？　冒険者じゃないんですか！？　神聖術を習得していらっしゃる学生さんでもないんですか！？」

「……？」

色々不可解な単語が出てきたな。神聖術ってなんだ？

あ、そうそう、この女性は、シャルルに買い物をしに行くと言う事らしく、たまたまシャルルに行こうとする僕を見つけ

「心細いんです！」

と断っても何度も何度も頼み込んでくるものだから、最後には僕が折れてしまった。そのため今の今までついてきてた女性だ。どうやらこういった事態に対応できる人間だと思われていたみたいだけ

ど、残念ながら冒険者ではないし、神聖術も知らない。というか、僕みたいな子供でも冒険者やってる人っているの？

ただ、それを聞くような状況じゃないし、情報収集よりは事態打破に向けて努力したほうがよさそう。

「ただの村人ですよ。だから逃げませんか？」

「ひぇ、やだぁ、怖いよぉ。男なんだからどうにかしてくださいよぉ！」

泣き出してしまった。座り込んでしまった。この馬鹿女、これじゃ逃げられないだろ。

……見捨てるには後味悪いし、はぁ。面倒だなぁ。

「はぁ、じゃあ、ちょっと目を瞑ってくれたら、助けますよ」

ばれなければ使ってもいいよね。斬り捨てたゴブリンの残骸とかは確認されるかもしれないけど、特に問題もないでしょ。さて、急がないと。ゴブリンはケタケタ笑いながら僕と女に近寄ってくる。にしても、調子が上がらないなぁ。

「はぃ、言うとおりにしますからぁ、助けてぇ」

「じゃあ、早く目を瞑ってください」

女が目を瞑ったのを確認して、袖を捲る。すると僕の二の腕に変な模様が描かれているのが目に入る。円が二周ほど、描かれている。

その模様に集中する。何も無い空間から、剣を取り出すイメージ。

すると、左手から不思議なオーラが現れ、そのオーラが剣をかたどり、やがて、本物の剣となった。左手の模様も消える。……いや、若干残ってるのかな。薄くなってるだけみたい。

魔剣ライフドレイン。アンデが魔剣の効果から推測した名前だ。切った相手の生命力を奪い、剣の力へ変換する。世界には、魔剣とか、神剣とか、特別な能力を持った剣が存在するらしい。そのうちのかなりレベルの高い魔剣で、体の中にしまいこめる魔剣なんて、数えるほどしかないらしい。

レアな一品てわけで、マニアとか、金に目がない無法者な冒険者とか俺を殺しにくるだろうから、ってことで使うのは控えたほうがいいとのこと。他にも理由があるんだけど……。

そんな凄い一品をなんで持ってるかって？　そりゃ、異世界に来た瞬間に拾ったボロボロの剣がたまたま魔剣だった。それを無価値だと思わず拾った僕の運の良さ。今はボロボロじゃなくて、鋭い刃を携えた頼りになる武器だけどね。

とりあえずそれを両手で構える。あ、ちなみに左手から取り出したけど利き手は右です。

ゴブリン達は僕が武器を取り出したのに驚き、二匹が僕に攻撃しようと近づいてきた。大振りで、すきだらけ。剣道２段の僕にそんな攻撃は、流石に通用しない。

それでも、二匹同時に切るのは難しいので、まず一匹に接近。僕の急な動きについて来れなかったのか、たじろいでゴブリンが握っ

ている棍棒を振りぬけず、慌てふためいている。そんなゴブリンに僕は容赦しない。

『面！！』

久々に、日本語で気を入れて振る。後ろで小さく悲鳴を上げる馬鹿女が目を開けていないか気になったけど、ここで集中切らすのも良くない。

とにかく、ゴブリンを一刀両断。抵抗なく相手の体を通過した刃は煌き、切られたゴブリンは右側と左側がお別れする。その間から赤黒い血が飛び出して、倒れる。赤い血なんだね。

剣が振動して、刃の輝きを微かに増した。ゴブリンから温かみが消えたように感じた。

ボロボロだった剣がここまで鋭くなったのはこういう理由だ。始めは切れなかったから、突き刺して殺していたら、どんどん切れ味が回復していった。名前の通り、斬れば斬るほど相手の生命力を奪い、その切れ味を増す武器ってことだね。

二匹目も

『面！！』

さっくり倒す。

ゴブリン三匹が僕へ向きなり、警戒しながら迫ってきた。しかも、頭も悪くないようで、三匹とも互いにフォローに入れるような距離を保っている。

「……ま、まだですかぁ……！？　ゴブリンの声が怖いですぅ」

ゴブリンの標的は女へと切り替わった。でもそれは僕にとってはチャンス。素早く一匹に近づく。僕の接近に気づき、棍棒を防御へとあてがうけど。

『胴！！』

素早く踏み込んで突きを放つ。豆腐のように木の棍棒を貫いて、そのままゴブリンも貫く。素早く引き抜いて、隣にいたゴブリンに向かって

『篭手！！』

横になぎ払う。ゴブリンは不思議そうな顔をしながら直立して立っている自分の日本の足を地面から眺めていた。ちょっと気持ち悪い。

そして、最後の一匹は

『面！！』

一刀両断。

弱い。小学生を相手にしてるみたいだ。不意をついたといっても、割とあっさり出来るんだね。

……まぁ、これで命の奪い合いは二度目になるわけだ。血を見るのは好きじゃないから、やっぱり出来れば逃げるに越したこと無い

ね。人間同士の切りあいは二度としたくないね。

キィイイイン

……お前は斬りたいってか。

キィイイイン

女を切りたいって？　やだよ、悲鳴とか、うるさいじゃん。

……キィイン

はいはい、ありがとね。

剣を左手にしまうイメージ。実物から再びオーラに代わって、左手に収束していく。そして、左手に完全にオーラが収まる。そして、左の二の腕に変な模様が濃く現れる。それを確かめてから、袖を元に戻す。

どうもこの剣は人を切りたがる傾向にあるらしい。呪われた刀、ムラサメ、みたいな？　洗脳効果とかあったらやばかったけど、この魔剣はそんなことは無かった。唆してはくるけど、そういう趣味もないし、必要が無きゃ切りませんよ。

「終わったよ」

「ひぇ……キャアアア！」

僕の姿を見て悲鳴を上げた。確かに、血まみれだけど。

「僕も好き好んでこうなったわけじゃないんだから。あまり叫ばないでくれますか」

ちょっと怒気を込めて言うと、女はひっ声を上げて、小さくうずくまった。

「ご、ごめんなさい。血が苦手で」

がくがくぶるぶる。隆介風に言うとガクブルしてる。んー。まぁ、こういうときは皆そうか。春も、流石の隆介もやっぱりケンカが終わった後とか震えてたしなぁ。

「僕も、苦手だよ。早く行こうか？」

僕がぎこちなく笑いかけてみる。こういうときは笑いかけるのが一番だって春が言ってた。

「は、はい、ぷっ」

顔を上げて返事してくれた瞬間、急に笑われた！？　な、なぜ！？

「へ、変な顔……」

う、嘘だ。僕は確かに、今微笑んでるはずだ。決して変な顔ではない。

「ぷっ、もう、やめてくれませんか……？」

涙を瞳にためて、笑いをこらえている。

く、屈辱……！！

異世界生活91日

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――

向井　夕（むかい　ゆう）　現状

武器　魔剣ライフドレイン

防具　異世界での服（血まみれ

重要道具　もってない

所持金　二万ギス　（家に3000ギスと500円を置いてきている。

技術　剣道2段

　　　異世界の言葉（聞く、話す、ちょっと読む、ちょっと書ける

　　　中学2年生レベルの数学

職業　デトラオン（悪魔の）食堂店員　（バイト）

００４（前書き）

彼が見た風景。それもまた、１つの別世界。

004

門番にものすごく睨まれ、少しいざこざがあった。

血まみれだもん。不審者ですよね。村からシャルルに来たのに、どうして血まみれなのか。魔物が出たといってもなかなか信じてもらえなかったが、たまたま服に張り付いていたゴブリンの皮膚が証拠になった。

なにやら騒がしくなっていたけど、僕に説明はなく、１０００ギス払って、服装を新品にして、シャワーをしろと命令され、それに従い体をきれいにした。

結局そのまま何事もなかったかのように待ちの中に通され、予定より５０分もかかったけど、ようやく聖なる都といわれる、シャルルへ来ることが出来た。やっぱ、魔物を進入させない装置が壊れたかどうかって言うのが議論になってるのかな？

気になるけど、今はおいておこう。それにしても、この町。凄い！

「うおー！　でかい！　写真で見た昔のヨーロッパみたいだ！」

「ヨーロッパってどこですか？」

「こんなとこ！」

「？？　とにかく、あんまり叫ばないでください。田舎も乗ってば

れちゃうじゃないですか！！」

「服装でばれますから、問題ないです」

「がーんっ！？」

ショートコントを道端で展開してばかりではなく、ちゃんと観察も済ませる。

ムー大陸でも有数の多くの人が住む大きな都。その名に恥じない広大さだ。町の奥に城みたいなの見える！　凄い！　凄いぞ！

レンガが基本的に使われていて、建物も、道も、道路も基本的にレンガ。車は一切無く、馬が馬車を引き、当たり前のように行き来してる。中にはドレスを着て、いわゆる貴族っぽいのもいた。

こんな光景もとの世界じゃ絶対にありえない。この世界に来ていい光景が見れた。

「あ、あの」

『凄い。これ電灯？　なんで車が無いのに電気が使えてるの？　文明の順序変だよね。本来ならガソリンとか、もっと一般的に普及していいはずなのに。あーこんなことならもっと勉強するんだったな』

「あ、あのぉ」

『信号は無いんだな。アンデのいる村じゃ電気は無いから、そんなに普及しているものじゃないんだろうな。この町に住んでいる人も流石に夜はろうそくとか油で火を点けて生活するのかな？　あ、そ

うか、魔法とか神聖術とか、そういったものがあるから、それの代理を探す必要がなかったんだ。　だから文明の成長が元の世界と違って変なのかな』

「すいません？」

『うわ、なにあれ。でっかい教会みたいなのある。こっちは商店街だ。残金１万９０００ギスあるし、いろんなもの買えるといいな。ってなにあれ！？　分厚い鎧の人が平然と歩いてる！　あれが騎士？　それともレベルの高い冒険者？』

「すいません！」

「うわぁ！？　な、なんですか？」

テンションがあがりすぎて、観察に注注していてびっくりした！

「私を無視して一人で何語でしゃべってるんですか！」

怒られた。しかも、テンションがあがりすぎて、自然と日本語をぺらぺらと話していたらしい。

「もう……あなた、名前なんですか？」

「名前？　あれ、言ってなかったっけ？」

そういうと、女の表情に影が差した。そういえば、女の人の名前知らない。自己紹介してなかったっけ。

「……あなた、嫌そうな顔して私と一緒に来てもいい、って言った

から。言い出せ無くて」

そうだったっけ。確かに今回みたいに見られたくないとこだってあるし、他人を守る義理もないし。面倒だたしなぁ。

「私は、セリア。２１です。苦手なものは血と女性の敵と魔物です」

後半は知ってるよ。とは言わない。

「僕は向井、夕、１４です。苦手なものは面倒事」

「じゅ！？　じゅうよん！？」

驚きすぎ。

「神聖術の学生なら納得ですけど、ゴブリン斬り捨ててましたよね！？　凄いです！」

し、しまった。１４そこらの子供が魔物を倒すなんておかしなことだったか！？　でも僕くらいの年の冒険者がいれば、そうか、神聖術が使えればもしかしたら戦える、だから冒険者も出来るとかそういうことか！？　そういえば、兵士にゴブリンからどうやって生き残ったか聞かれたときに「剣で斬り捨てました。剣はそのとき折れて、今はありません」って説明したときに、変な顔されたんだと思った！

セリアが本当にゴブリンを切ったって後押ししてくれなきゃ変な子供のレッテルを貼られるところだったからだ！　いや、むしろそれ目立つ行動をしたんじゃないか！？

「わ、忘れてください。あと、周りに広めないでください」
なんとか口封じに走る。知名度が上がると致命的だ。こっそり生活したいんだから。
「えー、何でですか！？　１４で魔物を剣で退治できるなんて凄いですよ！」
「そ、そこをなんとか……」
「えー！？」
こ、この女！　助けたんだからそれくらい聞けよ！
「わかりました。じゃあひとつ条件を飲んでください」
「ぐっ」
あ、足元見やがって……。
「帰りも、送ってください」
「わ、わかりました。必ず、送りします」
な、なんだ、たいしたことじゃなくてよかった。
「私の用事を済ませてきますね。日が沈み始める前にあのお店で待ち合わせしましょう」
時間という概念があるみたいだけど、時分秒の単位は存在しない。

不思議な文明の成長だなぁ。

変な危機が去って、わくわくお買い物タイムがやってきた。ちょうど商店街のような場所を見つけることが出来た。さまざまな露天が並んでいて、おいしそうなにおいやら、安い服から高い金品までずらずらと。ただ、金品は偽者のような気がする。確証はないけど、隆介がこういう場所で売ってる金品に本物なんてないんだ！　って泣きながら叫んでいたから。

きっと一杯食わされたんだろう。

「へいそこの男の子。何か欲しいお菓子はないかい？」

ふらふらと露天をさ迷い歩いていたら、駄菓子屋、かな。のおっさんに話しかけられた。

「財布、捜してるんですけど」

といいながらも、お菓子から目を離さない僕。正確には値札。この世界のものの価値というのを一通り見ておくべき。ここはお菓子を売ってる露天か。水あめ、クッキー、グミみたいなのと、氷菓子？　読めないけど、写真を見るに、ソフトクリームみたいなのが売っているらしい。どれもこれも８０ギス前後。

「お、子供の癖に生意気だねぇ」

なにぃ！？　この国の子供は普通持たないのか！？

……いやいや、そんなわけ無いか。そんなのだったら子供向けの駄菓子屋が子供を直接呼ぶなんて事しないだろうし。でも、出来る限り怪しまれたくはない。

「えっと、お父さんに、プレゼント」

と、誤魔化してみる。

「……いい子だねぇ。おじさん感動しちゃった。雑貨とかは向こうにあるよ」

「ありがとう」

なぜか感動された。父親にプレゼントっていう習慣は特にないのかな？

「ほら、サービスだ」

お、水あめっぽいのくれた。……１０ギスの物か。もっと弾んでくれてもいいじゃない。まぁ、この価格のこの世界の甘い食べ物っていうのも知るべきだよね。

……普通に、砂糖の味。

でも久々の甘いものだ。ずっと、冷めた米に、冷めた肉。要するにあまり物。あ、アンデが安く俺を雇ってくれてるって言うのは、あまり物処分係としても働いてるからなのか！？

……まぁ、食い扶持があるのはいいことだけどさ。

一言お礼を告げて、駄菓子屋さんを後にし、進めてくれた雑貨屋（？）に移動する。露天だから、必要なものはすぐに見つかった。財布が箱の上に綺麗に並べられている。元の世界で言う長財布ってというのはなくて、どれもこれも紙幣を二つ折りした形の財布だった。でも、綺麗で、とても機能的な形をしていた。硬貨はしまいやすそうだし、カードとかも取り出しやすそうだ……。カードって、この世界じゃ名に入れるんだろう？　身分証名称なのとかあるのかな。

それはさておき、ざっと見回すと3万ギスとか、高いものばかり。それともこれが一般的な人の持つ適正の財布なのかな。だとしたら手が出せない。

なんて考えていたら、箱の上じゃなくて箱の中に適当に詰まれている財布もたくさんあった。見た目はどれもこれもいまいちで、使いにくそうなものばかりだった。すぐ壊れちゃいそう。でも、これ大事。平均して２０００ギス程度。安いものは安いね！　僕からしたら大助かりだけど。

「財布財布……首にかけるやつか。これがいいかな」

首にかけるタイプの財布を発見した。ちょうど僕に合う。

「いらっしゃい。子供が財布なんて珍しいねぇ」

やっぱり珍しいらしい。子供は財布を持たないのか？

……鞄を持つ習慣がないからかなぁ？

この世界のポケットっていうのは本当に小物を入れるタイプで、財布は鞄に入れる習慣があるようだ。さっきからポケットに手を突っ込んで財布を取り出す人なんて誰一人いない。

僕は鞄なんてだるいものは持ちたくないけど財布が欲しい。ということで、高価をじゃらじゃら入れても問題ない皮の財布を買いました。１５００ギス。

即購入して、小銭、をジャラジャラと入れる。

そう。小銭しかない。

といっても、僕の感覚だと小銭なんだけど、これ一枚一枚がものすごい価値らしい。

金貨。一枚１万ギス。本当に金の塊だからびっくりだ。この世界だと金はそんなに貴重じゃないのかな。そして、作り方がわからないくらい精巧な模様が刻まれている。一枚一枚ずれなくこの模様だから、きっと製法が特殊なんだろなと思う。

銀貨。一枚１０００ギス。銀だね。これも模様が金のやつと同じ。

そして、銅貨、一枚１００ギス。わかりやすいね。これも模様が以下略。

それ以下は紙幣になっている。紙幣の方が高価より安いっていう、元の世界とは逆転してる状態だから、ちょっと違和感。

５０ギス紙幣。１０ギス紙幣。１ギス紙幣と種類がある。

つまり今僕は、金貨1枚と銀貨7枚と銅貨5枚を持っているわけだ。

財布が重くてたまらないね。だから、鞄が必要なんだろうな。でも、鞄ばっかりだと

「きゃー！」

……引ったくりが多くありそうだな。今まさに僕の目の前で女の鞄が黒い服の男に盗まれていった。

「誰か！　そいつを捕まえて！」

女が叫ぶけど、皆知らんぷり。聖なる都というにはちょっと薄情な人が多いね。僕もそのうちの一人だけど。しばらく眺めて、女がさめざめと泣き始めるのを見納めた。まぁ、盗るほうも悪いけど盗られるほうも悪いね。次にこの世界ではどんなものが売っているのかを探索しようと思う。

調べた結果は大体こんな感じ。

外食、安く食べようと思うとおよそ４００ギス。店から出てくる人の感想とか盗み聞きした。おいしく食べようと思うと１０００ギスほど。となると、うちの店一食５００ギスくらいなのは良心的なんだな。

衣類。一般人が着る服の値段は一着８００ギス～２０００ギスほどだった。

宿。一泊３０００ギスほど。読むのに注視していると、宿を借りようとしていると思われたのか。

「ませてる子供だなぁ～」

といわれた。……。これが、うわさに聞く、あの、ラブホかい……。隆介に聞いた話、女の子とキャッキャウフフとかなんとかするホテルらしいが、僕は一人ですよ？　そういう勘違いされるのもちょっと悔しい。それより、この世界にそういうのもあるんですね……。

なんていうか、あれだ。価値はあまり円と変わらないのかな。

１ギス＝１円くらいであってるかもしれない。物価は、安いものは安くて、高いものは高い。って感じだね。

なんて思案していると背後で怒号が。

「は、放せ！！」

「君の手にある鞄を話してくれたら考えよう」

「ち、畜生！！」

ちょっと横目にその現場を確認してみたところ、引ったくりが捕らえられていた。捕らえていたのは超イケメンで、さわやか声で、不思議な力を発しているように見える好青年。っていうか、主人公みたいなやつだった。

なにあれ凄く完璧。僕は言い知れぬ恐怖を覚えた。人類ってあんなに完璧でいいの！？　みたいな感覚。出来ればあんなイケメンとはかかわらずに生きていきたいね。隆介がなぜかイケメンに敵意を持っていたことから、あんまりいいことはないんじゃないかな。っていう安直な考えだけど。

正直、僕はイケメンが嫌いなわけではない。

ま、まぁ、それをさておき、他に、何か買うものあるかな。知識を得るために本とかでも、いいかもしれない。といっても本屋が見当たらない。露天には本屋はないらしい。普通のお店の中にはあるのかもしれないけど、店の名前が完璧に読めない上に意味もわからないから適当に入るのも時間がかかる。何より飲食店に入って何もせず出るという冷やかし行為は、子供でもなかなか許してはくれない気がする。

「っお」

商店街を抜けてしまった。露天もぱったり止まった。やはり本屋は見つからないか……。まぁ露天で本屋とか聞いたことないしなぁ。

……ん。あれは、冒険者ギルドってやつじゃないか？

変に武装した人間とか、変な魔法使いな見た目をしたやつとか、特にこれといって特徴がないのにどことなく怪しかったりとか、自然と気配を消す歩行方法で歩いてるやつとか、ちらほら集まっていた。

その中に僕のような年齢の子供はいなかった。

やっぱり冒険者って子供がなるもんじゃないよね。

となると、魔物に対抗できるって子供といえば、神聖術使いになるのを目指しているかどうかはさておき、そういう学生が抵抗できる手段を持っているわけなんだろうな。

……僕も使えないかなぁ。そういう特殊技能。

異世界生活９１日

向井　夕　（むかい　ゆう）　現状

武器　魔剣ライフドレイン

防具　新品の服

重要道具　もってない

所持金　１万７５００ギス　（家に３００００ギスと５００円を置いてきている。

技術　剣道２段

異世界の言葉（聞く、話す、ちょっと読む、ちょっと書ける

中学2年生レベルの数学

職業　デトラオン（悪魔の）食堂店員　（バイト）

財布を手に入れた！

００５（前書き）

彼にこの世界の技法は似合わない

005

うろうろ、うろうろ。うろうろ……。人間観察中。

うん、やっぱり、染めて無さそう。そうだよな、考えたらおかしい。この世界に着てから割りと目にしていたから気づかなかったけど、この世界の人達、髪が赤かったり、青かったり、でも染めてるわけじゃ無さそう。子連れの親子とか見てると一家全員髪の色が一緒だったりしてる。まぁ母親が青、子供が青、父親が薄緑。とかあるけど。

たしか、人間の髪の毛って遺伝子的に黒とか金とか、茶とか、そういうもの以外って有り得ないんだよな。確か。……んー。この世界の人達と元の世界の人の遺伝子は若干違うってことなのかな。一介の中学生がわかるわけないけどね。

馬鹿女は薄青色の髪の毛だったし、アンデはちょっと赤かったし、シュッテイマンは、僕と同じ黒色だったな。カラフル。

……他に特に変わったところはないな。武具屋と防具屋が普通にあるって言う点を除けば元の世界と、今のところは、変わりない。

でも、この神聖術店。これは一風変わった占いのお店なのか、それともこの世界に存在する特殊な技術のお店なのか。セリアも神聖術とか、僕が神聖術を学ぶ学生だとか。つまり、神聖術は魔物に対抗するための技法といえる。そのお店だ。

……入りたい。入りたいけど、左手の魔剣、ばれないかな？

魔法が忌み嫌われていて、魔剣なんてものを国に持ち込めば、死刑ものらしい。つまり、左手の剣がばれたら、一躍重犯罪者。

捨てようかな。この剣。邪魔だなぁ。

……キィン！？

何びっくりしてるのさ。この国で生活するのに邪魔なんだよ。わかる？　出来れば聖なる剣とかになってくれよ。

……キィィィ。

しょぼくれてもだめなんだぞ。まったく。今は手持ちが無いし、仕方ないから持っておくけど。ばれない方法とかないの？

「……お？」

左手の違和感がものすごく小さくなった。

気になって袖を捲ってみると、模様が消えて、いや、ものすごく薄くなってるだけだね。もしかして、これで入ってもばれたりしない？

キィン

なるほど。なら安心だ。捨てずに持って置こうじゃないか。ついでだから、この町にいる間はずっとその状態でいてね。

神聖術店といわれるだけあって、中は真っ白い消息がなされていて、なんだか神々しい。そして水晶が埋め込まれた杖やら、変な十字架が立てかけられてたり、まぁ、色々ある。神聖って言うだけあって、やっぱり元の世界で教会とか神様とかそういうのに関係がありそうなものばかりがならんでいる。

「おや、うちのような不人気店に来るとは、物好きな」

だって、人がいない方がいいじゃん。別にいいもの買おうとしてるわけじゃないし。お店の奥からおばあさんが出てきた。かなり、気品のあるおばあさんだ。４０、後半？　不思議と、そのおばあさんから神聖な感じがする。神聖術だけに。

「シャルイン学生かい？」

この町の神聖術学校の名前が、シャルインなのかな？

「いえ、町の外の村から、来ました。神聖術のお店、珍しくて入ってしまいました」

「……おかしな子だね。それならよりいっそう、うちより大きな神聖術の店にいくだろうに。怪しいね」

げ、鋭いぞ。お、おい、お前大丈夫か。

キィン！

任せておくぞ！

「……今、お前さんから変な気配を感じたんだが、気のせいかね。怪しいね」

「あ、あはは。大きいと、値が張るものばかりだろなぁって、気後れしちゃいまして」

お前もう絶対しゃべるなよ！？　ここで分けわかんない音立てたらへし折るからな！？

「……それで、うちに何のようだい」

「えっと、僕でも神聖術って、使えます？」

「……買い物しに来たんじゃないのかい？」

ああ、もうボロボロだよ！

「変な子供だよ。まぁ、付いてきな」

連れて行かれたのが真ん中に大きな水晶が鎮座した小さな部屋。

「触れな」

言われたままに、左、いや、右手で触れる。すると水晶はかすか

に光りだす。おお、何だこれ。おばあさんも水晶に触れる。そして、一言僕に言い放った。

「才能無いねぇ」

人が感動している最中になんて事を！？

「一応邪法の反応があったから見てみたが、そっち方面でもまるきり才能ないね」

邪法って確か、この国が忌み嫌ってつけた魔法の２つ名だったかな。いやいや、魔法自体は忌み嫌われてるけど、それ自体は邪法じゃないはず。いやいや、それよりも。才能がないって、もしかして、魔法とか神聖術は使えないってこと！？

「ちょ、ちょっとおばさん。どういうこと」

「まだ２３８だよ！」

嘘、だろ？

それは元の世界ではよぼよぼのおばあさんどころか二度死んでもお釣りがくるレベルだよ。元気に叫ぶなんてもってのほか、って言うかどう見ても５０代近くです本当にありがとうございました。

……はっはっは。

「いやいや、年齢のわりに若いのは認めるけど、２３８は僕の感覚だと十分おばさんだよ」

「おのれ糞餓鬼。エルフを愚弄するきか！！」

「へ？」

……エルフって、あれだ。長寿で耳がとんがってるやつ……耳、とんがってるー！

「うぉ、エルフ初めて、見た」

僕の素の一言に、おばあさんはあっけに取られたような顔をして、口を開いたままとまった。

「え？　……おまえさん本当に田舎者だな。それに、言葉遣いも下手だな……田舎者は皆そうなのか？」

怒りから反転、急にかわいそうなものを見る目で僕を見てきた。や、やめて！　なんか心が痛い！　元の世界じゃ別に田舎に住んでいるわけじゃ……。

「……それで、才能ないって、どういうことですか」

ちょっとショックを受けて元気がなくなっているけど、めげたりはしない。だって、才能ないから使えないって決まったわけじゃ。

「そのままだよ。おまえさんには内包神素値と魔素値が圧倒的に低い。魔法も神聖術も使えんだろうな」

アウトぉおおおおお！！　畜生！！　……んで、内包神素とか魔素とかなにさ。

「しんそ？　まそ？」

そういえば、初めての単語だ。素材の素に、神と魔っていう字がついているみたいだけど。魔力とかそういったものかな？

「簡単に言えば体の神素と魔素の放出レベルがものすごく低いってことだよ。これじゃ術を唱えても吐き出すエネルギー少なすぎて発動なんてしないね」

「……」

ちょっと、魔法が使えたら空を飛ぶとか、そういう夢誰でも一度

は考えるじゃない？

僕もそういった一人だったんだけど。……はぁ。

「そうですか……帰ります」

「まぁまておまえさん」

「なんですか」

「そんなお前さんでも術が使えてしまう道具があるのじゃ。ひとつ１万５０００ギス」

「……見ましょう」

およそ、三種類あった。

闇を浄化する浄化術の込められた腕輪。

体力を回復を促進させ、毎日の暮らしが楽になる治癒術が込められたネックレス。

神聖術初級以上中級以下の威力を誇る神聖波動術と、辺りを照らす閃光術が込められた指輪を薦められた。どれもこれも神聖術の一環らしいけど、神聖術っていうのは細かく分類されているのか？

「他の商品よりかなり高いよ？　１万５０００ギスって」
「馬鹿もん。お前さんが自身の扱う術を強化する道具なぞ必要ないだろう。あらかじめ神素が込めて、誰でも使えるような、といっても半ば護身用と便利道具みたいなものじゃが、それなりに効果になるぞ」
「まぁ、そうか……」
でも１万５０００ギスもあれば、一週間暮らしていけるぞ。
「しかも、あのでかい店には売ってない」
「貴重なの？　これ」
「私のお手製じゃぞ。エルフ族だから作れる」
「……本当？」
「本当じゃ。今ならサービスで神素を込めてやろう」
まだ込めてないのかよ！　とは突っ込まない。
「じゃあ、指輪頂戴」
「毎度。ミエルという。これからよろしくの」
「え？　えっと、僕は向井　夕。ユウって呼んでください」
「おかしな名前じゃの」

「それより、これからよろしくって」

「私にしか神素は込められないからの。尽きたら、有料で込めてやる」

これは、もしかして嵌められた？　男のロマンを弄ぶ悪女のような手口だ！！　とは紳士な僕は突っ込まない。せいぜい。

「せこいおばあさんだ！」としか言わない。

「何だって！？　なら指輪のエネルギーチャージサービス抜きでもいいんだよ！？」

「綺麗なお姉さん！　お金のない僕に慈悲の恵みを！！」

弱い！　なんて弱いんだ僕は！！　この厳しい社会の中を腰を低くしないと生きていけないなんて僕はなんて弱いんだ！！

……何してるんだろう、僕。

使い方を色々教えてもらい、最後に神素を込めてくれた指輪を貰

った。
「またご贔屓に」
嫌らしい笑みが怖くも、綺麗でもある……。もう、僕完全に毒されたよ。こうなったらお得意さんにでもなろうかな。
腕のいい神聖術道具店のエルフの店長ミエル。よし、覚えた。さて、セリアを迎えに行くか。

異世界生活91日

――――――――――――――――――――――――――――

向井　夕　（むかい　ゆう）　現状

――――――――

武器　魔剣ライフドレイン
防具　異世界での服
重要道具　ミエルお手製神聖術付与指輪（　神聖波動術　・　閃光術　）エネルギー＊100％
所持金　5000ギス　（家に3000ギスと500円を置いてきている。
技術　剣道2段
異世界の言葉（聞く、話す、ちょっと読む、ちょっと書ける

中学2年生レベルの数学

職業　デトラオン（悪魔の）食堂店員　（バイト）

仕組みがよくわからない指輪を手に入れた！

００６（前書き）

彼の持ちうる術は、この世界では付け焼刃

006

夕方。セリアも僕も用事を済ませていたので、帰ることにした。変な目で見てきた門番に軽く挨拶をして、シャルルを後にした。ざくざくと、村とシャルルを繋ぐ道をひた歩く。

林が夕日に当てられて綺麗に見える。そういえば、太陽系って、どうなってるんだろう。元の世界と同じように月と太陽があるけど、他の惑星とかはあるのかな……。宇宙に行った人とかいるかな。

ん、血生臭い……ここは血まみれのゴブリンの死体があったばしょか？　でもゴブリンは既にいない。処理されたんだろうな。

「シャルルでユウさんは何したんですか？」

思わず笑ってしまった。

「な、なんですか！？」

「年下に、敬語」

かぁーっと赤くなるって言うのは今のセリアみたいな感じなんだろうな。

「く、癖なんですよ！　もう、酷い人ですね！」

怒っちゃった。気にしてたのかな。

「まぁ、さっさと行きましょう。また襲われるかも」

「ひっ」

驚かすつもりは無かったんだけど、襲われるという単語に酷く反応した。ちょうど血生臭い道を抜けた直後だったから効果が強かったのかも。逆に僕より早く移動し始め、はやく行こうと催促してくるほどびくびくしてる。怖がりなんだなぁ。

でも、そう何度も異変があるとは思わないけどねぇ……。

「た、助けてくれぇえええ！！」

……無いと思うんだけどねぇ。隆介でいう、フラグを立てたのが良くなかったに違いない。

「ゆ、ユウさん悲鳴です！」

「そうだね」

「……助けに行かないんですか？」

え？

「行かないけど」

思ったままのことを言った。嘘を尽く必要も無いと思ったけど、セリアみたいな善人なら。

「な、なぜですか！？　モンスターに襲われているかもしれないんですよ！？」

言うと思った。うーん。面倒だな。

「いいですか。危険を冒して助けに行く、メリットありますか。それに、この辺りじゃ強い魔物は出ない、話」

「で、ですが、助けを求めてるなら、助けに行かないと死んじゃう」

「僕ら、関係ない」

ため息でも吐きたい気分だ。僕には何にも関係が無いじゃないか。正直言ってセリアに怒鳴られようが何されようが、構いもしないんだけれども。万が一ゴブリンの大群がそこにいて、僕一人で何とかできない状況だったら無駄死にしに行くようなものだ。僕らはさっさと悲鳴とは逆方向に走って村に向かうべきだ。なのにこの馬鹿は。

「助ける力があるのに、助けに行かないのは罪ですよ！」

はぁ。そういうのは一体誰が決めるんだよ。自分が罪の意識で潰されたくないからって、僕に押し付けないで欲しいな。こういうときは

「助ける力、無いから、助けに行かない、理由にはなりますか？」

こういえば、反論できないでしょう。おとなしく逃げよう……一抹の間が、空いている。これはもしかして……やばい、言葉間違った！　こういうこと言ったらこのタイプの人間は。

「わかりました、もう頼みません！」

うわぁあああああああやっぱり特攻したぁあああああ！！

どうしよう、流石の僕も知り合いが死ぬのは寝覚めが悪い。やっぱり人と関わるのは最小限がいいよ！

ああああああどうしようどうしよう！

キィイイン

うるせぇ！

キィン！？

お前が切りたいとか関係ないんだよ。とりあえず、お前を使うと有名人になるらしいから、最大限ば使いたくないんだよ……。あ、あれかな、人間も切り伏せちゃ……いやいや、元も子もないな。切り伏せず打撃で気絶とかさせれないかな。

でもなぁ、そういうの習ってないし。剣道の分野じゃないよなぁ。

……

……

……

「や、助けてー！」

「早く！こっちへ！」

「ひ、人！？助かった！」

「またゴブリン……！？　早く逃げましょう！」

さっき教えてもらったこの道具の使い方、何だっけなぁ。確か、波動術のほうが、指輪を目標に向けて

「魔退破！」

そう叫ぶと、指輪が一瞬光り輝き、見えない力が何匹かのコブリンを吹き飛ばした。

ゆっくり周りを見回してみると、ゴブリンが先程と違って８匹もいた。さらに、奥から嫌な感じがする。

「ゆ、ユウさん……ありが」

「黙れ馬鹿女、早く、そいつ連れて、村に戻れ」

正直僕の沸点は低い。煮えくり返ることが少ないからね。ただ、こういう馬鹿を見ると本当に腹が立つ。戦えないんだからさっさとどっか逃げて欲しい。

「なっ、馬鹿なんて」

反論なんて、はぁ。

「力あるやつだけ、助けること出来るんですよ。自分の幸せ、守れないやつが、他人なんて気にすることが出来る、世界じゃないでしょ」

それは初日に思い知ったことだ。あのときのことを思い出すと、本当に左手に宿る剣には感謝しきれない。

キィン

だからって人を切ろうぜって話にはならないよ。

……キィン

「……でも」

にしてもこの馬鹿女もわからないやつだな。

「反論は後で聞きます。論破もしてあげます。だから、早く逃げろ！！　魔退破！」

ゴブリンの接近に気づいていた僕は落ち着きながら波動を発射。数匹近づいていたが、吹き飛ぶ。その光景を震えながら見上げる二人。邪魔だ。邪魔だ邪魔だ邪魔！！

「さっさと行け、邪魔！」

「！？」

痺れを切らした僕は二人を蹴り飛ばす。すると小さく悲鳴を上げながら、シャルルと村を繋ぐ道のあるほうへと走っていった。後は勝手に村でもシャルルにでも、行くだろう。

もう一度、波動を発射し、ゴブリンたちと十分な距離を取る。

「来い！」

左手から素早く剣を取り出し、右手で剣を握る。

突然現れた剣に驚くゴブリンに容赦せず剣を振るう。

「面！」

一匹斬る。おそらく絶命したと判断。次を横になぎ払うように剣を振るう。

「胴！」

もう一匹斬る。上半身と下半身がずれたのを確認し、次のゴブリンへと目を向ける。が、棍棒が目の前に迫ってきているのを確認し、防御姿勢に意向。剣の柄の部分で棍棒を受け止めよう、としたが、あえなく失敗。向こうのほうが力が強すぎた。

「うわっ」

力で押し返され、姿勢を崩す。そんなときにもう一匹のゴブリンが僕を棍棒で横殴りする。面白いくらいに体が浮いて、まさに吹っ

飛んだ。木にぶつかることなく、数メートル吹っ飛んで、地面に転がった。何度も咳払いをするけど、一向に痛みが取れない。痛い、痛い！

もだえ苦しむ暇なんてなく、ゴブリンが追い討ちをかけようと僕に殺到する。それを許せば僕という名の死体が出来上がっちゃう。

「魔退破！」

指輪をゴブリンに向けて叫ぶ。先程より若干威力の落ちた波動がゴブリンたちを押しのける。その隙に何とか立ち上がり、魔剣を構える。

「は、はっ、はっ……」

上手くいかないなぁまったく！　昼のときは簡単に勝てたのに。運が良かったんだろうな、多分。今回は状況を完全に把握できてないし、自分の利を生かせてない。にも加えて、このダメージ。胃がむかむかするし、わき腹の痛みが足の枷になって足を動かせる気がしない。

「……ここで死ぬのかなぁ」

せっかく異世界に着たのに、面白いこと全然体験してない。もったいない。正直自分の生きることに興味が無かったけど、ここにきてようやく目標が出来たのに。

もったいない。

本当にもったいない。やっぱり見捨てて逃げればよかったのにな

あ。

「……道連れだよ！　来い！　切り殺してやる！」

「グァ！！」

ゴブリンの奇声とともに数匹突っ込んでくる。剣1本で対応は無理。迷わず準備していた指輪を向けて、波動を放つ。但し、1匹だけ残すように。計画どおり、1匹だけ吹き飛ばさず、その1匹だけが単独で突っ込んできた。

足はほとんど動かない。防御も無理。攻撃を受け流す！

斜めに構えた剣に振り下ろされた棍棒は受け流されて、すべるように僕の体を避けて、空を切った。やっぱり、ゴブリンは馬鹿だ。突いてくるという攻撃はしてこない。そもそも棍棒で突きなんて攻撃効果的じゃないもんね。

そのまま的となったゴブリンを縦に切り裂く。魔剣がエネルギーを吸って、切れ味を増す。あと、5匹。にしても、剣道はこの世界じゃあまりにも不向きだ。複数と戦う技法なんて一切ない。生きて帰れたらアンデに少し剣術ってやつ、教えてもらおうかな……。

4匹突っ込んでくる。それに対して指輪を向けて波動を放つ。ただ、もうエネルギー切れなんだろうな。2匹しか吹き飛ばせなかった。

「ぐぅ！　魔退破！」

もう1度、一匹に向けて波動を放つけど、その1匹も足を止める

だけにとどまってしまった。

完全にただの指輪になった。

とりあえず、突っ込んでくる1匹を切り倒す。足を止めただけのゴブリンも近づいてきたから殺す。

残り3匹が同時に突っ込んできた。波動はもう無い。光で目くらまし？　波動とエネルギーは共通だからそれは無理だろう。指輪は完全に使えない。

「くそ、くそ！」

突っ込んでくる1匹に剣を投擲。上手く突き刺さる。

残り2匹は、徒手格闘で対応するしかない。でもそんな技術僕は知らない！！　残された手段。左手を犠牲にする！！　痛みを覚悟するんだ！！

「ッギャ！」

1匹目に左手を突き出し、振り下ろしてた棍棒を振り払う。鋭い激痛付き。嫌な音が左手から聞こえてくる。完全に折れた。

「あああああああ！！」

みっともなく口から痛みを訴える叫びが出る。でも僕はそれに構ってる暇は無い！　すぐさま棍棒を振り下ろしてくる2匹目のゴブリンにも、素早く左手を突き出し、攻撃を払う。折れた左手に再び鋭い激痛が走る。

でも、次は思ったより痛くなかった。多分、もう左手はだめなんだろうな。

「はっ、はっ、はっ！！」

痛いだけの体を無理やり動かし、今まで棒のようでまるで動かなかった足を動かし、剣まで走る。もうほとんど痛みは気にならなかった。

「ぐぅ」

剣を右手で握る。

キィン……

……はは、心配してくれてるのか？　まぁ、次は僕じゃないいい主人でも見つけるんだね。

なんてやり取りもつかの間、ゴブリンたちが突っ込んでくる。でもラッキーなことにゴブリン2匹が足並みそろえて僕に突っ込んできた。僕は何も考えず、横なぎに剣を振るう。

面白いくらい簡単に、振り下ろしてきた棍棒ごとゴブリンを切り裂いた。

8匹。殺してやった。でも、まだ、まだ倒れちゃいけない。倒れて、ただで殺されるなんてもってのほかだ。

僕の気持ちに呼応してか、心なしか剣が鋭く輝いた。不思議と痛

みも引いた気がした。

「……あと、さっきから奥にいるのは何だ……？」

その奥へと目を向ける。もう何がきても、殺してやるだけだ……！！　……来ないな。目を凝らしてみないと見え……。

……小熊？　かわいらしいくりくりとした目だな。でも熊でも、殺さなきゃ殺される。下手したら喰われる。剣を投げることでもう一度、チャンスを。

とか考えていたら、小熊がなぜか泣きそうになっているように感じた。そんな気配を感じちゃ、剣を投げれないよ。ふと、視線を落とすと、間違いなく撲殺されたと思われる大きな熊が倒れていた。その傍には5匹ほど大きな爪あとが刻まれたゴブリンが倒れていた。

「……そういうこと」

僕は魔剣を左手に戻す。同じ被害者なら、べつにいいや。せめて、痛くないように食べてね。

僕は、次第に遠のいていく意識を、一気に手放した。

キィン……

眠いや。疲れた。

異世界生活91日

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――
向井　夕　（むかい　ゆう）　現状

武器　魔剣ライフドレイン

防具　異世界での服（血まみれ

重要道具　ミエルお手製神聖術付与指輪（　神聖波動術『魔退破』
・閃光術『光り輝き導く者』　）エネルギー＊5％

所持金　5000ギス　（家に3000ギスと500円を置いてきている。

技術　剣道2段
異世界の言葉（聞く、話す、ちょっと読む、ちょっと書ける
中学2年生レベルの数学

職業　デトラオン（悪魔の）食堂店員　（バイト）

ステータス　瀕死

００７（前書き）

彼にとって偶然は、その世界での奇跡

007

「痛い！」

目を覚ますと、全身が痛かった。

「……がぅ！？」

……小熊？

なんで小熊がいるの？　あれか、あの場所から移動してないのかな？　いや、天井が岩って時点で違うね。えっと……

あれだ、餌は家で食べる的な？

「君、移動したの？」

「がう」

岩の洞窟っぽいな。外を見ると、木々が見えるし、熊のすみかってとこか。外はどうやら、昼間っぽいな。ということは、丸一日寝ていたのかな。って、痛い？

「いたぁい！？」

「がぅ？」

痛いイタイイタイ！　傷舐めないでぇええ！！　わき腹舐めないで！　なんか、ジュウウウ、って焼ける音してる！　こんがり焼けちゃう！　ちょっと食べるなら生で食べてよ！

いやいや、消毒も必要か！？

僕ってもしかしてばい菌だらけかもしれないし……ほら、脂分には余計なばい菌とかいっぱいあったり、僕にだって流石にばい菌が溜まる箇所だってあるだろうし、ね。それ考えたら確かに僕だって焼いて食べる必要がああああいたいぃいいいい！！

斬るぞこの野郎！！　と、僕は体を急激に起こす……？

「……ってあれ？」

舐められたところが全然痛くなくなってきた。さっきまで体を起こすことすら出来なさそうなくらい痛かったのに、起き上がっても不思議と左手超痛い！！

「グォオオオオオ！？」

これは、熊の叫びではなく、僕の叫びだ。左手が凄く痛い！！

「……？」

熊がきょとんとした顔で痛がる僕を見つめていた。出来れば左手も舐めてくれませんかね……。とにかく折れてたの忘れてた。僕が無言で左手を指差すと、小熊が舐めてくれた。すると表面上は直る

が、骨は治らないみたいで変な方向に曲がったままだった。折れた場所は手首と肘の間だ。第三間接みたいになってて凄い痛い。でも、このままもとの状態に戻さないままだと、このままくっついて目も当てられないことになる……。

「……木の棒とかある？」

しばらく僕の絶叫が響いた後に。適当にちぎったズボンで木の棒と一緒に腕に巻きつけ、仮ギブスのようなものを作った。

「はぁ、はぁ、これで、しばらくは大丈夫……」

痛みのせいで疲弊しきった体をもう一度倒す。剣道のときに、複雑骨折じゃないけど、関節が外れた人の簡易治療を先生が行っていたのを思い出して、とりあえず、正しい腕の形にして木の棒で固定してみた。これが正しいかわからないけど、無駄でないと願いたい。

「にしても、助かったぜ小熊」

「がぅ」

さっき気づいたんだけど、この熊もやっぱり魔物の類なのだろうか。額に変な模様がある。傷を回復させる能力を持っているんだから、普通の熊ではないことは確かなんだけど。にしても、こんなに小さいのに親なくしちゃって、大変だな……。

「やばい。情が沸いてきた」

いかんせん他の生物に興味がわかないのに、ひとたび気にし始めるとすぐに情が沸いて気になっちゃう。ただでさえ僕の命を助けてくれた熊だ。くそぉ。どうにかならんかね。

とか考えていたら、僕のお腹からも小熊のお腹からもぐぅ、っと腹の虫が無く音が聞こえた。

「……僕に気にせず、何か食べておいで」

「がぅ」

本当に気にせず洞窟の外へ行って、食べ物を探しに行った。……ちょっと薄情……いや、そういうのは人間の感情なのかもしれない！！　ほら、熊とかだったら、固体の生存が大事なのかも……。それに、気にしなくてもいいって言うのは本当のことだ。さっきからお腹はすいてるのに、不思議と気分は悪くない。

キィン

……え、食べなくても生きていける効果なんてあるの？

キィン

ついでに回復力も高める？

キィンキィン

なるほどなぁ。生命力の使い道にはそんなこともあるのか。体の回復にエネルギーをまわすとか、良くわからないな。

キィン

どうしてだから人間を切ろうってなるんだ。他の生物より生命力があってもそれで殺される羽目になったら世話無いだろう。

キィン

おいしさは僕にはわからんぞ！？

……一人コントなんて寂しいぞ。

しばらく待っていると、小熊がいろんな木の実を持ってきた。僕の知識から言うと、どんぐりみたいなのだ。それが２０個ほど。それをおいしそうにむさぼり始め、僕の傍に９個置いた。

せっかく持ってきてくれたんだからと思って、ひとつ持って、硬い皮を岩に叩きつけてはずした後、中身を食べてみる。

まぁ、なんていうのかな、渋くて、すっぱくて、まず、い……！！

「……僕は、食べれないし、しばらく大丈夫らしいから、食べてい

いよ」

「……がぅ」

「すまなさそうにしないで。僕は大丈夫だから」

にしてもなんていい子なんだ。さっきから言葉も理解してるみたいだし。逆に熊がその程度での食べ物で足りるのかという不安が出てきた。本格的に情が移ってるな……。ふと洞窟の中を見回してみると、魚の骨みたいなのが転がっているのが見えた。やっぱりどんぐりだけじゃ子供の成長にはよくないだろう。

外は真っ暗だし、明日でもなにか食べるもの探しをしよう。明日までに左手ってどうにかならない？

キィン

なるのかよ！？　すごい！　じゃ、任せた！！

キィン

いや、人は切らないよ？

キィン……

翌朝、簡易ギブスを取り外してみると、赤く腫れあがっているが、

骨はくっついたらしく、激しい痛みがする以外なんとも無かった。

「う、ぐぅ……！」

まぁ、動けるほどには回復した。結構生命力を使ったのかな。ためしに剣を取り出してみると、初めて見たときほどではないが、ボロボロになっていた。やっぱり、エネルギーの量で切れ味が変わるのね。

「なんか、ごめん」

キィン

気にするなってか。お前人斬りたい斬りたい言う割にはやさしいのね。

「おきろー！　朝飯探しに行こうぜ！」

「が、がぅ？」

「朝飯探しに行こう！　魚だ魚！」

小熊を無理やり起こし、川に案内させた。魚を取れば万事解決だと思ったからだ。ただ、魚をとる方法なんて考えてなかった。いや、正確には魔剣を使わない方法を考えていなかったって言うのが正しい。

「……魔剣で斬ったら、肉が真っ白になるぞ……！？」

魔剣なんて使って魚とっても、生命力吸い取っちゃって、食べる

所じゃないもんな。そもそも、これ、生命力吸い取る剣だよな。

僕は適当な小枝を剣でカットして、槍っぽいのを作った。後は、これで魚を突き刺すだけ……。

でも現実はそんなに甘くなかった。小熊がさっきから頑張ってやっと1匹捕らえてうれしそうに俺に見せてきた。反して俺は1匹も捕らえられない。

「……恩返しできない」

愕然と川に両手両足をつく僕。情けない！　情けないぞ僕！　そんな僕をあざ笑うかのように、ザリガニのようなものが目に入った。

……ザリガニ？

ザリガニだ！！

それを見つけてから、僕の動きは素早かった。

「僕の細い腕なら出来る芸当なのです！　どうぞ食べてください！」

「がぁ～ぅ」

おいしそうにザリガニっぽい生物をほうばる小熊。……美味しいのかな。気になって僕も一匹を生きたままひん剥いて、刺身の状態にする。……ちょっと、気分が悪くなった。でもまぁ、食べるしか

ないし、川で適度に洗って、口に運ぶ。

「……うまい、のか？」

凄くどろどろした身。ぷりぷり感なんてなかった。刺身の甘エビの触感を想像通りの悪い方向へ１００倍走り抜けた感じで、しかし甘みは失わず、へんなお菓子を食べているような、食べていないような。

「食べれないわけじゃないからね。いいか」

そのノリで数匹食べる。まぁ、腹ペコよりはまし。くらいには回復した。剣が生命力生命力うるさいので、葉っぱを数枚切ってあげたところ、ふてくされて不貞寝をし始めた。剣って寝るの？

「さて、恩返しも済んだし、戻るかな」

僕は岩から立ち上がり、魔剣を左手に戻す。先程血まみれだった服を洗って、人にあっても不審に思われる程度で済むくらいの身だしなみにしたから、大丈夫だろう。

「じゃ、達者で暮らせよ」

連れて行きたいのも山々だけど、正直、アンデの迷惑をかけてしまうのもどうかと思う。だから僕は、小熊に片手で別れを告げ、何とかシャルルと村を繋ぐ道へと抜け出し、村へと向かった。

嬉しいことに魔物には遭遇せずに道に戻れた。幸先良さそうだ。

なんて思っている僕に、ここで１つ誤算が生まれた。

「間違いない」

そう確信せざるを得ない。後ろから足音が聞こえるのだからなおさら。

着いてきてるよ、どうしよう。僕はすぐに振り向いて、僕の後を着いてきている熊に説得を試みる。

「……いいか、小熊よ。今から行くところ、村。お前を、たべちゃうぞ！」

首を傾げられた、かわいい。じゃなくて！

TAKE2

「小熊よ。僕は、ゴブリンを倒しに行く。だから、危ない！」

ふんふん鼻を鳴らして臨時戦闘態勢を取った。四方八方に注意を向けた！

僕への注意もそらさない！　なんて味方思いなんだ！　って違う！

TAKE3

「む！　向こうから魚のにおいがするぞ！？」

「がぅ」

しないよって言われた気分だ。

TAKE4

「うぉおおおお！！」

逃走という由緒正しき手段！　これで逃げれないわけがない！
俺の体が万全なら！

「……がぅ」

大丈夫って声をかけてきたんだと思う。なんでかって？

「ゼェッゼェッゼェエ！！」

左腕まだ痛む。わき腹も表面は回復したけど結局中身はまだ痛い。
加えて空腹＋疲労困憊状態。走ろうと思うほうが間違えていた。なんて考えていたら、小熊はやさしく僕を抱きかかえ、一度走ってそれた道に戻り、先程まで歩いていた方向へ歩き始めた。

いまさらだけど、この小熊、僕の身長ほどある大きさだ。なのにこう、お姫様抱っこされる気分いったら、ええ、なんだか気分がいいといいますか。

……もう、いいや。なるようになる。

村にたどり着いたらもう夜だった。村の入り口に人がいたのが見えたので、村には入らず小熊の背から降りて、村の様子を観察する。入り口にはなぜか、おろおろしている馬鹿女と無表情のアンデさんが立っていた。

「……小熊もいるしなぁ。柵超えてさっさ中に進入したほうが」

なんて考えていると激しい殺気を感じた！！　それに驚いてアンデを見る。不敵な笑みを浮かべて僕を睨むアンデ。なにがなんだかわかっていない馬鹿女はきょとんとして、後ろに立っている小熊はがたがた震えている。

アンデは口だけ動かし。待っていると、僕に告げた。これは、もしかして死亡フラグを立ててしまったのではないだろうか。それを伝え終えるとアンデは馬鹿女を残し、懐かしき食堂へと歩いていった。馬鹿女もアンデにあわててついていった。

「小熊よ」

「がぅ」

「もどりませんか？」

「!?」

異世界生活??日

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――

向井　夕　（むかい　ゆう）　現状

武器　魔剣ライフドレイン

防具　異世界での服（血まみれ

重要道具　ミエルお手製神聖術付与指輪（　神聖波動術『魔退破』

・　閃光術『光り輝き導く者』　）エネルギー＊5％

所持金　0ギス　（家に3000ギスと5000円を置いてきている。　5000ギスはいつの間にか闇に消えた

技術　剣道2段

異世界の言葉（聞く、話す、ちょっと読む、ちょっと書ける

中学2年生レベルの数学

職業　デトラオン（悪魔の）食堂店員（バイト）

ステータス　良くない

００８（前書き）

彼が生きるために人では必要

008

小熊の住処に戻るという案は破棄し、素直に家に帰った。あの様子だと、僕の気配は完全にキャッチされていて、逃げようとすれば追跡者のようにストーカーしてくるに違いない。とりあえず、早速アンデの食堂・デトラオンに戻った矢先にきつい一撃（拳骨）を貰った。凄く痛い。小熊がそれを見てアンデに攻撃を繰り出そうとするが、鋭い殺気にやられて、完全にガクブル状態になってしまった。可哀想。可哀想だが、どうにもしてやれない悲しさが……。

「てめぇ、5日も何してやがった」

「……へ？　そんなに経ってる？」

「経ってるよ！！」

もう一撃。頭がくわんくわんする。暴力は良くないね。暴力反対！！

そんな僕の気持ちをぶつけるべく、アンデを睨みつけるけど、反してアンデはなぜか気持ち悪い目をしていた。世間一般的に言えば優しい瞳って感じだけど、普段のアンデを知っている僕から言わせれば気持ち悪い。本当に気持ち悪い。なんていうか、飴玉あげるよおいでおいで！　っていうちゃちな手法で子供を誘拐しようとする大人みたいな気持ち悪さだ。

しかし、これを告げてしまえば恐らく拳骨が僕の頭を強襲するに

違いない。危機を回避するにもここは1つ、穏やかな反応で

「……無事で、何よりだよ」

「うわ、気持ち悪い」

追加で3コンボいただきました本当にありがとうございました。

……いやちょっと、垂直に振り下ろした拳骨が3発連続であたるってどういう技術！？　もうアンデ拳で餅つき出来るよ！

「たく、人が心配していたってのにこの糞餓鬼は……」

小僧から糞餓鬼にランクアップ！　あまりの嬉しさに涙しながら痛みにもだえ苦しんでいると、僕の後に着いてきたアンデは小熊に近づいた。

「……非常食か？」

そう呟くアンデに小熊はさらに震えだす。やめてあげてください。

「えー、と、友達だよ」なんて説明すればいいか迷いに迷ったが、友達っていうのが無難な気がした。「ゴブリンに親を殺されちゃった、で、着いてきた」

漠然とした説明だけど、アンデもあまり深い説明を求めていない

ような気もするので省略！

アンデがずっと熊を観察しているけど、急に熊を観察している目が鋭くなる。

「……こいつは幻獣じゃないか」

「幻の獣？」

元の世界で言う幻獣・ゲンジュウのことかな。

「この熊の額の三日月のような模様が特徴で、癒しの力を宿している熊だ。この国の特別保護種だ」

え、それって、許可無く狩猟したり、勝手に飼ったら罪になるって感じ？

「いや、……熊が人を選ぶ。だから、密猟は死罪だが、こいつが小僧を選んだなら、いいだろう」

「あ、なんだ。いいって、よかったよかった」

俺は無事な右手で小熊をなでる。背が高いので頭をなでるのも一苦労。そんな僕を気遣ってか前足を下ろし、四足歩行状態に。

「がぅがぅ」

……今までずっと2足で動いてたから気にならなかったけど、熊って本来移動は四足歩行だよね？　……そんな疑問はさておき、喜んでいるみたいだ。にしても小熊は完全にアンデを怖がっているよ

うで、対角線上に必ず僕を挟んでいる。

撫で終わると、すかさず前足をあげて、二足歩行状態になる。やっぱ元の世界の熊とは違うね。

「本当は人に懐くなんて有り得ないんだが……まぁいい、小僧と熊、てめぇら腹減ってるだろ、食ってけ」

久々に食べたアンデ飯は神の味がした。やっぱり、ザリガニモドキとは比べ物にならないおいしさだった。

「それでゴブリンはどこで出た」

「多分この辺とこの辺。帰りは戦ったから。親熊のしたいがこの辺りにあるはず」

「おかしい。首都の聖域のはずだ。この村からシャルルまでの内側に魔物が出るなんて本来有り得ない。いるだけでも魔物はダメージを受けるほどの区域だ。魔物が出たんだったら、聖域を構築する機関に以上が出たのかもしれん」

なるほど、聖域って場所だから魔物が出ないって断言できてたんだ。でも、そうじゃなくなったから魔物が出たと。

「噂は本当かもしれないな……」

噂？

「……二日前には聖域を構築する機関に以上は見られないと検査を行ったものから正式な報告が得られている」

じゃあ、何が原因なんだ。

「小僧以外にも、聖域圏内で魔物に出くわしたという報告が各村から上がっていて、この村の近くに魔窟があると噂だっている。俺は最近魔素が濃くなっていることと今の話から噂は本当だと思っている。小僧にはわからんと思うが魔法が使えるとわかるんだ」

魔窟？　魔物の巣ってところでいいのかな。

「本来魔窟が現れるのも有り得ないが、魔窟は魔素をうみだし、神素の力を退ける効果がある。逆に聖域では神素の力を底上げして、魔素を退ける効果がある。だから、魔窟が生まれるなんて有り得ない。」

ちょっと説明が不足気味に感じるけど、アンデなりに一生懸命話しかけてくれてるんだから、我慢我慢。後で情報をまとめよう。

「だが、1つだけ有り得る場合ってのがある。それが、人工的に魔窟を作って、魔物を引き寄せているという場合だ」

アンデの話をまとめるとこういうことになる。

・魔窟の効果は　神素　を退けて、魔素を生む
・聖域の効果は　魔素　を退けて、神素の力を強くする。

・魔素を用いた魔法を行使するアンデだから、魔素が濃くなっているのがわかり、魔窟があると断言できるらしい。
・魔物は、魔素に惹かれる性質がある。
・魔窟は、魔素が濃くなったところに偶発的に出来る性質がある。だから聖域で出来るなんて有り得ない。
・上位の魔法使いは、ある道具を用いると魔窟を生成可能らしい。この国じゃ死罪。魔法嫌いすぎ。

……ふむ、はた迷惑な。何も僕が出かけるって時に作らないで欲しい。

「俺がこの村にいる限り、この村で魔物による被害なんて出さないようにはする」

なんて頼りがいのあるアンデ。ナイスガイだよ。流石元騎士。

「が、外に出るやつまでカバーは出来ない。だから小僧。しばらく村を出るのは禁止だ」

それは、仕方ないね。でも、万が一僕しか手を出せない状況になったら、そのときのために、僕は。

「……アンデ」

「何だ。今の説明で不備があったとしても俺は責任を持たないぞ」

そんなの百も承知だよ。そうじゃなくて。

「剣、教えて」

「……あ？」

え、怖い。何でそんなに殺気出して睨むの！？　でもここで折れたらいけない。こんな殺気日常茶飯事。バイト中に殺気が飛び交うなんて良くある話。……なにその殺伐としたバイト現場、怖……。元の世界じゃ考えられないね。

「……本気か」

しばらく僕に襲い掛かってくる殺気に耐えていると、アンデが話を進めてきた。

「なんとか、今回は大丈夫だったけど、次は勝てるとわからない」

「お前、強いんじゃないのか」

「強いのは、この剣」

そういって俺は左手をぽんぽんとたたく。初めて殺しをした日も、ゴブリンと始めて遭遇したときも、この剣がなければ僕はとっくに死んでいた。

「強くなりたい」

いつか、旅に出て綺麗な景色を求めに行くのに、この世界じゃお金より強さが必要だって身に染みてわかった。

「……いいだろう。だが、その左手が完治してからだ。熊の力である程度回復したんだろうが、親熊じゃない限り表面的な治療しか出来ないはずだ」

その通りである。

「わかった」

そこらへん文句を言ってもしょうがないので、甘んじてうなずく。

「それより、この五日間の集計。溜まってるんだ。無償で働いてもらうぞ」

「……サー」

そこらへん文句を言っても殴られるだけなので、甘んじてうなずく。

「さー？」

「えっと、わかりました先生。って意味かな」

家の中じゃ狭くて、重くて飼えないので、小屋が出来るまで家の裏で寝泊りしてもらうことになった小熊さん。アンデとの会話と集計の仕事を切りのいいところで切り上げて、小熊に会いに来た。

「がぅがぅ」

「もう夜。まだ寝てなかったね」

ふふふ、ちょっと小熊にビックサプライズを持ってきました。

「まだ、名前ないでしょ。僕、名前を考えました！」

せっかく一緒に住まうことになったのに、小熊と呼ぶのはやめないとと考えた結果だった。

「がー？」

「小熊だから、リトルベアー！」

「がっ」

首を横に振られた……だと……！？

「き、気に入らないと申すか」

「がぅ」

「ぐ、じゃ、ビッグベアー！」

「がっ」

「返答早い！？　気に入りませんか……」

しまった、断られると思ってなかったからすぐに残りの弾がなくなってしまった。えっとえっとえっと～～？？？？

そうだ、英名が駄目なら日本語の名前にしよう。そうだそうしよう。

「熊吉」
「がっ」
「なぜ！？」

もう何がいけないのかわからない。

「五郎ぉ」
「がぅ」
「えええええええええええええええ！？」
「うるさい黙れ小僧！」
「なんで熊吉がだめで五郎がいいんだ！？」
「しばくぞ小僧！」
「信じない、僕は認めない！」
「いい度胸だ潰してやるぞ小僧！」
「がぅ」
「ちょちょちょ包丁持ってなんですかアンデやめうわあああああ！？」

その晩はカオスだった。僕が認める。

次の日。ボロボロだった服を捨てて、綺麗になった僕で久々にバイトをし始めた。相も変わらず昼間は冒険者であふれ、わいわいとにぎやかに飯を胃袋へと収めていく人が大勢入ってきた。中には村の住民がいたりするが、村の人達も冒険者と会話に花をさかせたりして楽しんでいる様子だった。

それと、窓ガラスがまた2枚ほど割れているのに気づいた。お金を集計しているときにも、ごっそりとお金が減っていたところを考えるに、あの糞共が僕がいない間に着たんじゃないかと、そう思う。

「おお、ユウじゃないか。無事で何よりだ！」

まぁそれはさておき、ごちゃごちゃと人であふれかえる食堂に既にお馴染みの客がいた。

「シュッテイマンさん。久しぶりです」

「アンデのオヤジが飯作りをミスしまくって大変だったんだぜ。心配かけさせやがってよぉ」

なんだかんだ殺伐とした野郎だらけの空間で、幼い僕の存在は意外と癒し系のキャラクターを確立させていたらしい。にしても、アンデには結構心配かけさせたんだなぁ。今度改めて謝らないと駄目かな。……いや無理。僕、また反射的に気持ち悪いって言いそう。

「にしても、すまないな。魔窟が出来たなんて、あの時は知らなかったんだ」

「いえ、運が悪かったと諦めます」

もしワザとならご飯の中に生ものとか辛い調味料とかふんだんに入れてやろうと思ってたけどね。

「そうか……これは前回の狩で手に入れた道具なんだが、お詫びの印にやる」

といって、僕に髪留めのようなものを渡してきた。爪みたいで、長くて、バネで挟むタイプのやつだ。

「髪留め？」

聞いてみた。

「髪留めだ」

髪留めらしい。

「僕、男だよ」

そう告げると、シュッテイマンの仲間たちが後ろで爆笑し始めた。口々にシュッテイマンのことをゲイ扱いする発言が飛び回り、気づいたら食堂全体がシュッテイマンを冒険者公認のゲイになっていた。

「……酷い目にあった」

そう呟くシュッテイマンはどこか疲れている様に見えた。

「なんか、すいません」

僕は新しく料理を運びながら、シュッテイマンに謝った。手が空いたところで改めてシュッテイマンの近くに行って、この髪留めは何なのかを聞いた。狩で手に入れたものなのだから、多分普通のもじゃないのではないか。と思うわけだ。

「それは、つけているだけで目が良くなる代物だ」

「目が？」

「そうだ」

ためしにつけてみる。この世界に着てから散髪は行ってないから、伸びっぱなしで邪魔な前髪をどけるのにちょうどよくもあった。一番邪魔な前髪をまとめ上げ、髪留めをつける。鏡を見てみる。うん。悪くはないと思う。さて、次は視力だけど、僕は両目とも１．２と、悪くもよくもない視力の持ち主だ。

「おお」

店の端にいる客の顔がはっきり見える。これは凄い。流石ファンタジー。魔法って凄い。

「凄いですね。こんなもの貰っていいんですか？」

「ああ、優秀な神聖術使いが仲間にいるからな」

「は～い坊や。いつもありがとうね」

シュッテイマンが指を刺す場所には、その優秀な神聖術使いだと思われる白衣のローブを着た女性がいた。見た目は凄く清楚だが中身が元の世界で言うギャルみたいな感じだった。

「いつもご来店ありがとうございます」

とりあえず、数ヶ月で習った営業スマイルを浮かべておく。ところで、僕にこれをくれる理由に神聖術使いがいるって言ったけれども。

「神聖術にはそういうのがあるんですか？」

とシュッテイマンに聞いてみると、どうやらそうらしい。神素を用いて行使する神聖術。大きく分類すると四種類ほどあるらしい。

・神聖波動術　・神聖治癒術　・神聖浄化術　・閃光術

の四つ。そのなかの、神聖波動術には、肉体を強化する術があるらしい。その１つで、ウォント・シーイングっていう術があるらしい。視力を強化するだけじゃなく、目が見えない人に目を見えるようにする術だそうだ。流石に眼球がない人には使えないらしいけど。流石ファンタジーだな。

そのなかでもエンチャントアイテム、今で言うこの髪留めにはそういう術を刻み込み、物が自然に神素を集めて常に効果を発動し続ける特殊な技術で作られた高価なものらしい。

貴重なのには変わらないけど、刻み込まれた術のレベルが低く、

この程度のアイテムは貴重価値以外に価値が無いらしい。と言われても、売れば高値だろうに。ありがたい。

「じゃあ、ありがたく貰いますね」

「おぅ。……あ、そうだ」

「はい？」

仕事に戻ろうとした僕を引き止めるのは、何用だい？

「家の裏の、幻獣は、どうした？」

窓から少しだけ見える五郎の背中を指差して聞かれた。僕もなんと言うか迷ったけど。

「帰り、なぜか懐かれてしまいまして」

と、無難なことを言った。

「……お前大物になるよ」

笑いながらそういわれたが、僕は首を傾げるしかなかった。

昼の部が終わって、さて五郎の家を作ろうと意気込んでいるところにアンデがやってきた。

「家を建てるには、村長に申請しないといけない。行って来い」

ということで、村長の家に五郎とやってきた。

「ひゃ、ひゃあああああああ～！」

村長は５０前後のおじさんで、アンデよりは老けている。そんな村長が五郎を見て杖を取り出したのを見るところ、神聖術使いか魔法使いのどちらかだろう。

「村長。始めまして。僕はユウといいます。こちらは五郎」

僕がお辞儀をして、挨拶をし、次に五郎を紹介する。

「がぅ」

真似してお辞儀をする五郎。かわいい。

「げ、幻獣！？」

額の模様が見えたのか村長は杖を落としそうになるくらいに動揺していた。

「ゆ、ユウといえば、アンデのとこに突如現れた期待の新人バイトさんか。わしのことは覚えているかな」

「……あ、一度だけ来ましたよね？」

確かに、見覚えがある。一月ほど前だった気がするけど。

「ふ、ふぅ、それで幻獣をつれてどうしたのかね。まさか、密猟したと？」

眼光が鋭くなる。でも、悪いことはしていないので、僕はそれにひるむことは無い。

「あ、いえ、懐かれまして。飼うことにしたんですが、家を建てても良いですか？」

「なっ、夏！？　秋！？　なな、懐かれたあ！？」

それはもう、死んでしまうのではないかと思うほどに驚いていました。それほど幻獣に懐かれるのは珍しいことなんだろうな。というか、落ち着いて欲しい。

家を作るのはすぐに許可が下りた。国が保護種に指定している生き物を野ざらしにするなんてもってのほか。とのことだった。

家を作るのには、丸五日ほどかかった。が無事に完成。

「……へたくそだな」

「うるさい！」

アンデにそう呟かれてもおかしくないほど見た目が汚い六角形の家。なのに屋根は二つ折りの屋根。もう完全にへたくそだ。まだ家にあった３０００ギスを使って、木材と釘やら購入したのにこの出来は酷い。家の中は風がびゅーびゅー入ってくるし、ぐらぐらして

いるし、今にも倒れそう。それに加え、扉もない。

「はぁ、しかたねぇ、ちょいと貸してみろ」

「？」

そこからぼーっと、たまに手伝ったりしながら二日間アンデが家の製作をしていたのを眺めていたら、あら不思議。ボロボロで変なところじゃない部分を探すほうが難しい家が、なんだかちょっと綺麗になった。近くの木を切り倒して入手した木材で柱を作り、扉には部分には藁をたらしつめて、風が入りにくいようにした。家の床は木材が五郎の重みに耐えられないので、そのまま地面。

まぁ、五郎的に寝るには不便じゃないけっこう広い家が出来ました。

異世界生活１００日

――

向井　夕　（むかい　ゆう）　現状

武器　魔剣ライフドレイン

防具　異世界での服（新品

重要道具　髪留め（エンチャントアイテム：神聖波動術　ウォント・シーイング）

ミエルお手製神聖術付与指輪（　神聖波動術『魔退破』　・

閃光術『光り輝き導く者』　）エネルギー＊５％

所持金　２８ギス　と　５００円

技術　剣道２段

異世界の言葉（完全にマスター）

中学２年生レベルの数学（暗算が得意になってきた）

職業　デトラオン（悪魔の）食堂癒し系店員　（バイト）

幻獣の熊、五郎が仲間になった？

視力が良くなる髪留めを貰った！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9290z/

魔剣から始まる物語

2012年1月14日12時52分発行